BROKEN COIN

全五十巻

特 46

始

特100
468

THE
BROKEN COIN

活探
偵劇

名
金

全五卷

大正
5. 3. 17
内交

本書の特色

空前の活動大寫眞『名金』が一度び東京の活動界に現はるゝや、我れも人もと之れを觀に行つて、忽ち人氣の頂上に達した。眞に著想の奇拔にして波瀾萬壑なる、而かも俳優の妙技と背景の雄大と相俟つて、流石に大陸的の名寫眞なる哉と感嘆せしめる。そして今や『名金』を知らざる者は共に活動寫眞を語るに足らず否寧ろ世上の新事物に疎い者として輕蔑せらるゝの有樣だ。斯樣な次第であれば之れを小說風に書き直したものも最近一ケ月足らずの間に四五種も世に出た。然るに原寫眞が全編五十卷 全長五萬呎と云ふ無類の長尺物で、之れを映寫する

には少くとも十五六時間を要する。であるから何れの書も之れを上下二編位に分冊し、其の一編だけでも大抵三百頁前後、最も少きも百五十頁は費してゐる。之れを全部通讀するには、何んな讀書力の早い人でも優に一日乃至二日位は要するだらう。而かも餘りに長い爲めに編者自身が既に面喰つたと見えて啻に文章の冗漫蕪雜なばかりで無く、筋の一貫しないものさへある。予輩は之れを遺憾として、無駄な會話や小説としては無用な場面を省略し、眞の『名金』の精髄とも云ふべき箇所を極く少時間に知悉し得るやうに、斯かる小冊子に綴つた次第である。

大正五年彌生上の五日　　天洞生識

探偵活劇　名金

目次

（一）怪しき金貨の半片……（二）
（二）汽船内の怪漢……（三）
（三）フレデリック伯の大望……（四）
（四）途上血塗れの人……（五）
（五）伯爵邸に忍び入る……（六）
（六）沙漠の大格闘……（七）
（七）サチオ伯の野心……（八）
（八）馬賊の人質にさる……（九）
（九）國王毒殺？……（一〇）
（一〇）蝙蝠の如くに……（一一）
（一一）百姓一揆迫る……（一二）
（一二）國境の峠にて……（一三）

目次

（一三）ローの苦心……（一三）
（一四）惡漢アパッチ……（一五）
（一五）縛された男……（一四）
（一六）キチーと馬賊の隊長……（一五）
（一七）アパッチの隱れ家……（一五）
（一八）ローー、キチーを救ふ……（一六）
（一九）魔酔劑を仕込んだ煙草……（一七）
（二〇）千仞の谷へ馬と共に……（一八）
（二一）四挺のピストル……（一九）
（二二）窓掛の蔭から……（二〇）
（二三）キチー隣國へ捕はる……（二一）
（二四）グラホーヘンの牢舍へ……（二三）
（二五）キチー王宮を荒れ廻る……（二三）
（二六）毛布の下から……（二五）
（二七）寢臺の蔭へ……（二四）
（二八）女と女……（二五）
（二九）檻の中へキチーを……（二六）
（三〇）殺人の嫌疑……（二七）

目次

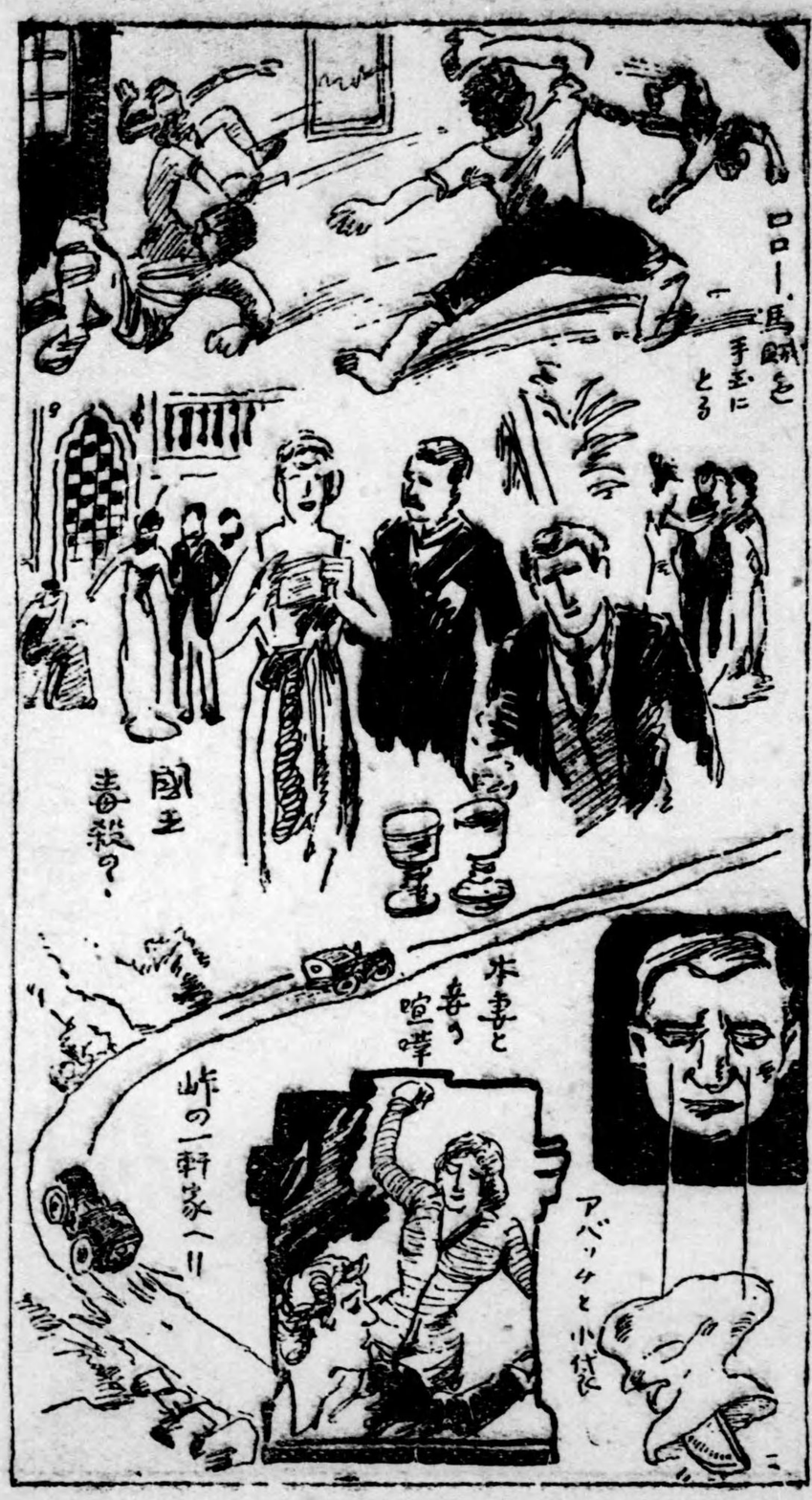
（三一）胸元へピストル……（二八）
（三二）汽車と自働車と馬……（二九）
（三三）峨々たるロッキー峠……（三〇）
（三四）兩國の開戰……（三〇）
（三五）地下室に累々たる骸骨……（三一）
（三六）アパッチの自働車へ……（三二）
（三七）ローー、猛牛と格闘す……（三三）
（三八）グラホーヘンの出兵……（三四）
（三九）紙片の怪文字……（三五）
（四〇）樹上のローー……（三六）
（四一）慘憺たる戰ひの跡……（三六）
（四二）柔かい變な荷物……（三七）
（四三）自働短艇で全速力……（三八）
（四四）船底の黑奴……（三九）
（四五）包の中から女の腕……（四〇）
（四六）クイン號の沈沒……（四一）
（四七）キチー蠻人に捕はる……（四二）
（四八）キチー火刑に處せらる……（四三）

名金目次

（四九）岩窟に女の聲……（四四）
（五〇）怪しの老人……（四五）
（五一）蠻人と大格闘……（四六）
（五二）ロローの父……（四七）
（五三）船長、キチーを挑む……（四七）
（五四）グレツホーヘンの總理大臣（四八）
（五五）遙かに敵艦……（四九）
（五六）ロツキー峠下の激戰……（五〇）
（五七）裝甲自働車で突破す……（五一）
（五八）兩伯眞劍の勝負……（五二）
（五九）財寶の所在……（五三）
（六〇）神前の王冠……（五四）
（六一）卅年前の物語……（五五）
（六二）一切の疑問氷解……（五六）
（六三）春風春水一時に到る……（五七）

目次 終

キナー嬢金貨の
碧片を買ふ
旅客ドレオダエンに向ふ
円窓より覗ふフレチリッツ
キナー、ロローの隊商と
秘けりる
サケオ伯
キナーに接吻を迫る


ロロー、馬鞭を
手玉にとる
国王
毒殺？
峠の一軒家
本妻と
妾の
喧嘩
アベッケと小付

四挺のピストル
キチーを檻の中へ
一輪のばらの花
戦闘の両国
地下室に骸骨
自働車より汽車へ

紙片の文字
ロロー猛牛と格闘
鉄殺？
自働般にて逃ふ
怪しい荷物の中から
クイン号破裂沈没

グラハツフェン宜戦
牡早自伯
早り
幸一
かる
長花の宮
サケオ伯
あの山入る

キタ一 孤島の雪人
雪人
フレデリックの
ピストルい
孤島と
刑史
島の他人は
ロローの
父
船長の恋

探偵活劇 名金（全五十卷）

黑谷天洞編

登場人物

グレツホーヘン國王　ミチエル
グラホーヘン國王　フイリツプ
グレツホーヘン國伯爵　フレデリツク
女新聞記者　キチーグレー
グラホーヘン國伯爵　サチオー
グレツホーヘン國王愛妾　エロイス
快漢　ロロー
惡漢　アバツチ
其他數百名

（一）怪しき金貨の半片

米國紐育のガゼット新聞社へ或る日一通の書狀が屆いた。それに依ると何か興味ある探偵小説を起草して呉いと云ふのである。社長は女記者のキチーグレーを一室に呼んで其事を命ずる。キチーは快諾して材料を探すべく出掛けた。

キチーは年の頃二十二三歳、眼の涼しい、極めて表情に富んだ顔立で、溢るゝばかりの愛嬌と、何物にも屈しない精悍な氣が眉宇の間に漲つてゐる。で、純育の市街を彼處此處と彷徨ふ中、圖ある骨董屋の店先で、廿七八歳の屈强な壯漢が、陳列品の中から十圓金貨の半片を見出して、骨董屋の主人に値段を聞いて去る。キチーが其後へ來て、主人に掛合つて其の金貨の半片を買つて歸る。例の男は間もなく入れ違ひに入つて來て其由を聞き、地輔を踏んで口惜しがつたが後の祭。忽ち氣を換へてキチーの後を追ふ。

（二）汽船内の怪漢

キチーは家に歸つて、早速に其の金貨の半片を取出して熟視すると、ラテン語で以て『グレッホーヘンの北の方に當り或る敷石の下に莫大の金銀財寶が埋めてある』との意味の怪文字が記されてあるのだ。キチーは胸を躍らした。然し、他の一片がなければ其の所在が判然としない。之れ正しく探偵小説の好材料であると、キチーは社長に相談して、歐羅巴の南端に介在する一小王國グレッホーヘンに向つて出發する。

船の甲板に出て四方の景色を打ち眺めて居たキチーは、怪しき男が自分を附狙つてゐることを發見し、問題の金貨の半片をば豫て用意の偽物と取代へて置く。暫らくして來て見ると、果して其の金貨は盗まれてある。流石のキチーもギョットしたが、敵の裏を掻いた我が計略の圖に中つたのを喜ぶ。

（三）フレデリック伯の大望

キチーはグレッホーヘン國に着し、或る旅館に投宿して、日々自働車で金貨の他の半片を探し廻る。

グレッホーヘン國では今や國政紊亂の結果王室は非常な窮乏に陥つてゐる。而かも國王ミチエル二世は愛妾エロイスの色に溺れ、夜を日に繼いでの遊蕩耽樂。これに引換へ同國伯爵フレデリックは一世の傑物で、あばよくば王家秘藏の金貨を盗み出して、自分が王位に即かうと云ふ大野心を抱いて居る。そして其の金貨の半片は遙かに米國に在ると聞いて、豫てロローなる部下をして其の探査に遣はしてあつたのである。ロローはキチーを米國から見えつ隠れつ附狙つて來て、船中に於て偽の金貨の半片を盗み去つた男。

(四) 途上血塗れの人

今日もキチーは自働車に乘つて出掛けた。すると行く手の道に當つて、一人の壯漢が血塗れになつて仆れて居る。キチーは自働車の中に助け入れて旅館に歸り、早速に應急手當を施して顔の血を洗つて能く見れば、圖らずも例の怪しい男！　偽金貨の半片を盗み去つた男！　キチーは驚きの餘り言葉も出ない。其の男は即ちロローである。ロローもキチー

を見て實に驚いた。

ロローは船中に於て盗み取つたる金貨の半片をば偽物とは知らずフレデリック伯の前に出すと、伯は直ちに其偽物なるを看破り、火の様になつて怒つた。そして果ては大きな鐵の棒を以てロローをば散々に歐ぐつたのである。ロローは、伯はこれまで自分の主人でありながらも深く其の處置を怨み、玆にキチーの親切に感激してその腹心の配下となる事を誓ふ。

(五) 伯爵邸に忍び入る

金貨の他の一片は既はフレデリック伯の手にあるならんと信じてゐるロローは、疵の癒るを待つて之れを盗み出すべくキチーに相談した。キチーは早速に同意して、一日兩人でフレデリック家に忍び入る。人影なきを幸ひに奥へ〳〵と進み行く中、忽ち數人の屈强漢が現はれ出でゝロローと大格闘を演ずる。キチーは窃かに隣室に忍び入つて其處か此處かと探す中、壁にかけてある圓い桿が動いて其

下からヌッと顔を出した男がある。これぞフレデリック伯爵！『よく來ましたネ。お前の金貨の半片を此處へ置いてお行き。』と冷笑して居る。キチーは驚いた。而かも今やフレデリックは攫み掛からうとする。キチーは聲の限リロローを呼んだが、其の來るや遲し、キチーは遂に何處ともなく擔ぎ去られた。

（六）沙漠の大格闘

ロローはキチーの叫びを聞いて素破一大事！と、敵を投げ倒し蹴仆して表へ飛び出すと、遙か行手の方を一臺の自働車がキチーを載せて疾風の如く駛る。ロローは夢中になつて走りかけた。すると折柄一臺の空自働車がやつて來たので、急ぎこれに飛び乘つて其後を追跡させる。暫くすると、前の自働車は茫漠たる沙漠に差蒐つて止まつた。ロローの自働車は直ぐ追ひ付て玆に再び格闘を演ずる。敵はロローの剛力に叶はじとや思ひけむ矢庭にピストル亂射した。ロローは不幸にも二の腕を打たれて沙上に打仆れる。と同時にキチーも驚きと疲れとのために其處に仆れて氣を

失ふ。――此時既にキチーの懐なる金貨の半片は奪はれて了つたのである。

『殘念だッ』ロローは我身の痛手を外にキチーを助け起して此事を發見するや、齒噛をして口惜しがつた。

軈て兩人は駱駝に打乘れる隊商の一隊に救はれて、グレッホーヘンの隣國グラホーンの伯爵サチオの狩獵小屋に連れて行かれる。

（七）サチオ伯の野心

サチオ伯は年頃三十二三歳、顔の圓い目尻の下つた好色漢で、キチーの美貌を一目見るなり思ひを寄せる。然しキチーは柳に風と受け流して居るのでサチオ伯は業を煮やし、或日ロローの居間の戸口に外から錠を下してキチーに挑みかゝる。果ては力任せにキチーを抱いて無理に接吻をしようとする。ロローは隣室にあつて唯ならぬ物音を聞きつけ、室を出ようとするが何うしても戸は開かぬ。

折柄近所の沙漠を横行する馬賊の一隊が襲うて來てサチオの室に闖入する。一方ロローの居る室にも戸を蹴破つて入り、玆に入亂れ

て大格闘をする。何分不意の事として此方には武器を取出す暇もなく、ロローは遂に賊の彈丸に仆れる。サチオ伯とキチーとは人質として馬賊の部落に連れて行かれた。

(八) 馬賊に人質にさる

一日馬賊の隊長の小屋の前にグレッホーヘン國王の侍臣が馬を乘着けた。それは賊首の手紙に依つて隣國の伯爵サチオと一名の美人が捕虜となつて居ることを知り、金を持つて受取に來たのである。そこでサチオとキチーは危き難を免れて、侍臣と共にグレッホーヘン國の王宮を指して歸る。

キチーは玆にグレッホーヘン國王ミチエル二世に謁見するの機會を得て、問題の金貨の半片は未だ王の手許にあることを知る。王は何時しかキチを愛し、金貨の半片を之れに預ける。キチーの喜びは一方でない、豫て金貨を狙つて居る例のフレデリック伯は、斯樣な事とは露知らず、或日の事、王の居間に忍び入つて彼處此處と探す。キチーは此時窓掛の蔭から顔を出して『ホヽヽ金貨は玆にありま

すよ。』

(九) 國王毒殺?

キチーは一度び王宮を辭して旅館に歸ると隣室から何か話聲が聞える。耳を澄ますと其れは、今夜王宮の宴會で王に毒酒を勸めようといふ相談をして居るのである。キチーは驚いて直ちに之れを王の許に知らせる。すると又自分の室の樣子を窺てゐる怪しい人影がある。キチーは王から預けられた金貨を自分で持つて居るのは危險と思ひ、之れを人に氣附かれぬやうに狀袋の中に封じ込んで、王の處に屆けさせる。

そして今度キチーは、フレデリック伯の許に在る金貨の他の半片、即ち自分が先日沙漠で格闘の際フレデリックの部下に奪はれたものを奪ひ返さんと再び伯の邸に忍び入る。然るに又もやフレデリック伯に見附けられ、到頭二階の一室に監禁される。

(一〇) 蝙蝠の如くに

キチーは何とかして逃れ出でんものと、月

色皎々たる外を眺めてゐると、窓の下に人影が動いてゐる。そして小聲で『ロローですよ』と云ふ。沙漠の狩獵小屋で馬賊に襲はれた時別れたきりのロローー。キチーは夢かとばかり驚き且つ喜んだ。

『サア其處から飛んで私の足に摑まりなさい』とロローは、向ふの建物の廂にぶら下つた。キチーの居る窓から其處まで四五間も隔て居るが、キチーは思ひ切つてヒラリと蝙蝠のやうに飛び着いた。そして無事に地上に降りて、兩人は伯の邸を逃げる。

（一一）百姓一揆迫る

こちらは王の夜會、數多の紳士淑女が胡蝶の如く踊つてゐる。フレデリック伯は折も好しと、毒の入つてゐる酒を王に勸めた。王は先刻キチーの方から注意があつたので、之れを飲む振をして手巾の中にあける。そして如何にも醉つた樣にして自分の居間に退いた。少時經つてフレデリック伯は、薄氣味惡い笑みを洩らしながら王の居間に入り樣子を窺ふと、王は狸寢入をして居るのだ。伯は倒れん

ばかりに驚いた。宜し、然らば更に一計略と今度は豫て喋し合せて置た多くの無賴漢を百姓に扮裝せ、王宮の廣場へ集めて『國を治むる力なき王を殺せ』と鬨の聲を揚げさせる。

フレデリック伯は此樣を見て打ち喜んで居る處へ、先刻監禁して置いた筈のキチーが、王と手を取合つて威容堂々とやつて來た。伯は呆然として立ち竦んだ。

（一二）國境の峠にて

キチーが王と手を組んで舞踏室に入つた時金貨を封入した先刻の手紙が展いた。取手遲しと開いて見れば、こはそも如何に中には金貨の影も形もない。キチーは驚ろいて邊りを見廻すと、其處に先日自分と共に沙漠の馬賊の處から救ひ出された隣國の伯爵サチオが、意味ありげな笑ひを含んで立つて居る。そしてポケットの間から金貨の半片をチラリと見せた。キチーは目の色を變へる。

サチオ伯は沙漠の狩獵小屋で自分の意に從はなかつた復讐だ！　と言はぬばかりの一瞥をキチーに呉れて次の室へ入ると、そこへ自

分の本國の王フイリップから密書が屆いた。サチオは讀み終つてから使者に向つて『今夜の八時半、國境の峠にて金貨を……』と囁いた。此時窓掛の蔭にてキチーの眼と、更に凄い二ツの眼が輝く。凄い眼の持主は誰？　グレツホーヘンに閉えたる惡漢アバッチである。

（一三）　ロローの苦心

金貨の半片はサチオ伯の手に入つた。そして『今夜の八時三十分、國境の峠にて』とは何を意味するか。兎に角キチーはロローと共に密かに峠へ行く相談をした。

其前に當つて金貨の他の半片のあるフレデリック伯の邸へ、キチーはロローと三度び忍び入る。すると既にサチオ伯の部下の者が前に入つて、フレデリック伯の居間の中を探して居る。ロローは矢庭に飛び出して其男を縛り上げ、キチーと共に隈なく室内を探す。然し矢張り金貨の半片は見當らぬ。而かも時間は將に八時三十分に垂んとする。サチオ伯の部下を其儘後に殘してロローとキチーは自働車に打乘り、峠に向つて出かける。月は皎々

と冴てゐる。

（一四）　惡漢アバッチ

二人の自働車はやがて峠に近い一軒の怪しい家に近づいた。キチーとロローは自働車から降りて木蔭に身を忍ばして居ると、サチオ伯が後から又自働車でやつて來て、其家へ入つた。時は正に八時三十分、時刻は好しとキチーとロローは窓口から忍び込むと、其後から更に一個の人影！　其れは惡漢アバッチである。而かも手には氷の如き短刀！

短刀はキチーの頭上に閃めいた。再び、三度び！　正に喉元目がけて斬られようとする時、アバッチの腕はロローの怪力によつて抑へられた。此の物音を聞きつけてサチオ伯は隣室から飛び出し來り、アバッチをば自分の部下と感違ひしてロローをば取抑へさせる。玆にサチオ伯及び其の部下と、ロローとの間に大格闘が始まる。此時サチオ伯のポケットから金貨の半片が飛び出した。アバッチは素早く之れを奪ひ取つて窓から逃げる。

ロローは過つて頭を柱に打ちつけて仆れた

爲に、後手に縛り上げられて了つた。キチーは隙を窺つて逃げ出す。

（一五）縛された男

話換つて王宮を辭したフレデリック伯は、自分の家へ歸つて見ると、一人の男が縛された儘打仆れて居る。何うやらサチオの部下の者らしい。縛を解いてやると、男は禮を述べて門外に立去り、待合せた自動車に乘つて國境の峠に向つた。フレデリック伯も其後を自動車で追ふ。

男はサチオ伯の處へ歸つて見ると、其處に先刻自分を縛つた奴が、今度は反對に縛られて仆れて居る。即ちロローである。『態を見ろー』と罵りながら横面を打つと、ロローはむくり立上つて其男を蹴飛ばした。そして少時格闘の末、隙を窺つて逃げる。

ロローは表に飛出すと其處に一臺の自動車がある。アバッチを追ふべく早速これに躍り込んで一目散に走り出すと、運轉手臺の下から一人の男が顔を出した。それはフレデリック伯である。

（一六）キチーと馬賊の隊長

アバッチを追ふて峠の家を逃げ出したキチーは、今茫漠たる沙漠の中を急いで居る。それは彼の馬賊の力を借らうとして行くのだ。キチーが曾て人質として馬賊に捕へられてゐた際、女ながらも其の大膽な態度に馬賊の隊長は感じ入り、危險な時はいつにても援兵を貸す事を彼女に約したからである。

『アバッチの家を襲うて、金貨の半片を取戻して戴きたい。』と、キチーは隊長に會つて斯う言つた。隊長は直ちに引受けた。

馬賊の一隊はやがて宙を飛ぶやうに砂烟を立てゝ沙漠を走る。

（一七）アバッチの隱れ家

町端れの廢寺の地下室、こゝが惡漢アバッチの隱れ家である。今しもアバッチは金貨の半片を掌に載せて悦に入て居る。そこへアバッチの妾と本妻、並びに五六人の乾兒がドヤドヤとやつて來た。

『そんな金貨の破片が何になりますか。』

『馬鹿を云へ、もう一ツの破片が手に入ると、グレッホーヘンの寶の所在が分るのだ。』

と、得意さうに見せる。

『こらッ、其の金貨を返せッ』と、突然後の方で叫んだ者がある。それは例の馬賊の一人である。地下室から煙草の烟の立ちのぼるのと、ピアノの音の洩れるのとに依つて、彼等はアバッチの所在を突きとめたのだ。

『何をッ』アバッチは怒號した。

こゝに兩者入亂れて大格闘となる。キチーは地下室の上の井戸のやうな穴から、此樣子を眺めて居る。

（一八）ロロー、キチーを救ふ

フレデリック伯が中に潜んで居るとも知らずに其の自動車で驅けつけたロロー、アバッチの隱れ家の前で降りて、やがて地下室へ忍び込まうとすると、其處に女の人影！

『おゝロローさん』と呼んだのはキチーである。そして彼女は事の仔細を物語る。

『宜しいッ』とロローは叫んで地下室へ降るキチーも續いて入つた。

アバッチの一味と馬賊は何も入亂れ爭ふて居る。そこへロローが飛び込んだので格闘は更に烈しくなつた。此時アバッチの懷から金貨が飛び出した。キチーは之れを手早く拾ひ上げる。誰も氣がつかない。——が、キチーは賊の爲めに捕へられた。地下室の上にマゴマゴしてゐたフレデリック伯も捕へられた。ロローだけは怪力を揮つて逃げ出したのである。

（一九）魔醉劑を仕込んだ煙草

『金貨を盜んだのは貴樣だらう。』と、アバッチはキチーを責めつけた。

『否、あの方ですよ。』とキチーはフレデリック伯の方を指した。そこでアバッチは伯を地下室に連れて行つて、魔醉劑を仕込んだ煙草などを勸める。フレデリックは之れを知つてゐて口先だけでふかして居る。幾ら經つても煙草の利目がないのでアバッチは驚く。而

かも散々に愚弄される。

こちらはキチー、一旦逃げ出したロローに巧みに救ひ出されて、共に馬で駈け出す。これを知つたアバッチは直ちに乾兒をして自動車で追跡させる。こゝに馬と自働車の烈しき競走が始まつた。

（二〇）千仞の谷へ馬と共に

キチーとロローは馬の手綱を引絞つて一目散、山と云はず野と云はず驅りに驅つたが、何を云ふにも自働車が全速力を出して追ひかけて來るので、迚も尋常の事では間に合はない。でロローは一策を案じ間道を傳つてドンドン逃げて來たが、思ひ掛けぬ斷崖の端に出てハタと進退谷つた。

『ロローさん何うしよう。』キチーも困つた。

『私に任せなさい。貴嬢は向ふの藪蔭で見物して居なさい。』とばかり、其儘駈つて五六間前の斷崖から、馬諸共千仞の谷底へ眞逆樣に飛び降りた。キチーは仰天した。アバッチの乾兒の方では其んな事を知らないから、其儘

自働車でロローの後を追ふと、何條堪らふ、凄まじい爆音と水煙を立てゝ墜落する。ロローの方では拔手を切つて巧みに向岸へ泳ぎ着いた。キチーも今は安心してロローの處へ馬を駈け着ける。やがて二人は共に旅館に歸つた。そしてフレデリック伯を救ひ出して自分等の味方にするべく、王の處に伯の危急を知らせる。

グレッホーン國王ミチエル二世はキチーの手紙を見て大いに驚き、直ちにアバッチの隱れ家に向つて兵を出動させた。

（二一）四挺のピストル

キチーは王に手紙を遣ると直ぐに、ロローを連れて例の金貨の半片を探しに四度びフレデリック伯の邸に忍び込んだ。やがて伯の居間へ入つて苦心の結果、一個の怪しい仕掛けを施した抽出を見附け、漸く其中に手を入れて探すと果して金貨の半片！　轟く胸を抑へながら之れを取出し、アバッチの處にて奪ひ來つた半片と繼ぎ合はして見ると、正しくピタリと合ふ。

『占めた！』と、キチーは打喜びながら不圖向ふを見れば、突然窓掛の蔭から一挺の短銃！　と同時に側の窓掛からも一挺の短銃が覗いた。キチーは驚いて後ろを振向くと、今度は二挺の短銃が銃口を向けた。キチーの驚きや如何ばかり。折角探し出した金貨の半片を捨てゝ去らねば命が助からぬ。餘りの口惜しさに涙も出ない。

（二二）窓掛の蔭から

遂々キチーは金貨の半片をば打捨てねばならなかつた。すると後の方の二挺の短銃は突然方向を換へて、兩側の窓掛から覗いてゐる短銃に向ひ、『其短銃を捨てよ。』と合圖して、段々に近寄つて行く。兩側の短銃は仕方なしにガラリと床の上に取落された。キチーは此場の樣子を怪しみながら佇んで居ると、やがて後ろの窓掛の蔭から現はれた男、其れはロローである。キチーは神の助けとばかりに喜んだ。そして兩側の窓掛の間から出て來たのはミチエル王の愛妾エロイスと、サチオ伯の部下のジャックとであつた。

キチーはロローに出られたので安心して、投げ出した金貨を再び手に取らうとすると、『キチーさん、有難うございました』と云つて出て來たのはフレデリック伯。彼はキチーのお蔭により、王の兵に依つてアバッチの處から今し方救ひ出されたのである。

（二三）キチー隣國へ捕はる

フレデリック伯はキチーの顏を見て、ニヤニヤと笑ひ出した。するとロローが氣を寬ましたのを見て取り、矢庭に飛び付いて其の二挺の短銃を奪ふ。ジャックは此時短銃を床の上から拾ひ取つて突然キチーに突きつけた。そして驚く隙に乘じキチーを抱て飛び出す。門口には一臺の自働車が待つて居る。ジャックはキチーを抱へた儘、これに飛び乘つて隣國グラホーヘンに向つて急ぐ。ロローは其れと見るや、伯の隙を窺つて飛び出した。

フレデリックは後に殘つて、足許に落ちてゐる金貨の半片を取り上げて見ると、いつぞや自分が部下に、沙漠でキチーから奪ひ取ら

したものではなくて、以前ミチエル王が持つてゐた金貨の半片だ。

（二四）グラホーヘンの牢舎へ

グレッホーヘン國と沙漠を隔てゝ相隣れるグラホーヘン國へ、キチーは自働車に乗せて連れて行かれ、そして牢獄に投ぜられて了つた。キチーの後を追つた來たロローも王宮の兵士に捕へられて、キチーの居る隣室の牢獄に投ぜられる。

或日の事、キチーの居る牢舎の戸を開けて入つて來た者がある。其れは例のサチオ伯。

『キチーさん、私の心が分りますか。どうぞお察し下さい。』と、無理に接吻をしようとする。――ところへ一人の兵士、

『伯爵、王様がお召しです。キチー様も。』

（二五）キチー王宮を荒れ廻る

グラホーヘン國王フイリップは、キチーの

才幹を見拔いて、何うかして自分の部下にしたいと思ふ。然し、キチーは中々に應じない。そして今は毎日惡戯をしながら王城を歩き廻つて居る。番兵どもは王の命に依つて、默つてこれを見てゐるより外はない。果ては王冠をいぢくり廻したり、番兵をくすぐつたり、玉座に腰掛けて巫戯けたりする。

キチーは今日も番兵に冗談を言ひながら王の庭園を彷徨ひ歩く。そして左あらぬ態にて門の前まで來ると、一臺の自働車がある。キチーは之れに飛び乘るが早いか、グレッホーヘン指して走り出した。これを見た番兵は始めてキチーの逃走と氣が附き、馬首を連ねて後を追ふ。王城では最後の手段として大砲を打つた。轟然たる響きと共に白煙濛々として砲彈はキチーの後に落ちる。が、幸ひに負傷をしなかつた。キチーは漸つと國境近くまで逃け延びてホッと一息吐くと、不思議や自働車の中にある毛布がむく〳〵と動き出す。

（二六）毛布の下から

毛布の下から現れたのはロローであつた。

『まアロローさん何うしたの？』

『牢から逃げ出して此處に隠れてゐたのです。』と、ロローとキチーとは互ひの無事を喜び合ふ。

グレッホヘーンではフレデリック伯、キチーとロローとが今グラホーヘンに捕はれて居ると聞いて機は好しと、キチーの旅館に向ひ給仕に幾らかの金を握らせて其の居間を隈なく探す。が、肝腎の金貨は出ないで女の持つ麗めかしいものなどが出る。密かにキチーを慕つてゐるフレデリックの血は湧いた。キチーの寫眞を裏に貼つてある鏡を懐に忍ばして、やがて名殘り惜しさうに去る。

（二七）寐臺の蔭へ

フレデレック伯が去ると間もなくキチーとロローが歸つて來た。そして着物を着代へるや直ちに、共にフレデリック邸に向ふ。

これと擦違ひに惡漢アパッチは五六人の部下と共にキチーの居間に忍び入る。それとは知らずに此時、キチーの後を慕つて來たサチオ伯も部下の一人をして忍び込ませた。で其

の男が彼處此處と探して居ると、突然アパッチは寐臺の蔭から現はれて組付いた。上になり下になり爭つてゐる中に、アパッチはサチオ伯の部下の短銃を奪ひ取つて其胸板目がけて續けざまに二發打つた。男はアッと云つて斃れる。アパッチは物蔭に隠れた。

處へ旅館の給仕や女中どもは、物音を聞きつけて遣つて來た。見ると一つの死骸が横はつゐる。やがて急報に依つて警察の方から檢べに來る。犯人の嫌疑はキチーとロロー、並びにフレデリッ伯に掛つた。

（二八）女と女

キチーがフレデリック邸に忍び入らぬ前に既にミチエル王の愛妾エロイスが忍び込んで居た。エロイスはキチーの來るのを見るや驚いて窓掛の蔭に隠れる。

キチーは其んな事とも知らず、頻りに探し廻つてゐる。今度は例の怪しい仕掛けの抽出の中にもない。不圖、室の隅の机の上を見ると、小さい塔形のものがある。振つて見ると、カタ〳〵と音がする。扨てば？　と其の中を

探ると果して金貨の半片！　キチーは思はず「おゝー」と聲を揚げて喜んだ。

『其の金貨は此方へ寄來しなさい。』と、突然向ふの窓掛の蔭から短銃を差向けて現はれた一人の女。其れは例のエロイスである。キチーは矢庭に其の腕に獅嚙みついた。エロイスは『あッ』と叫んで短銃を取落すと、キチーは其れを手早く拾つて突き着けた。

（二九）檻の中へキチーを

キチーは金貨を懷にして悠々と立去らうとすると、不意に誰か後ろから飛び出して短銃を奪つた。それはフレデリック伯、

『キチさん、金貨を置いて行きなさい。』

キチーは仕方泣く〳〵金貨を其處へ投げ出した。そして隣りの室へ逃げて階段を二三段上ると、フレデリックは入口の柱の釦を押した。すると階段の前と後からスーウと高い柵が持ち上つて、キチーは檻の中へでも入れられた態。フレデリック伯はニヤ〳〵笑ひながら、先刻キチーの室から盜んで來た寫眞を見て居る。

其處へロローが周章て飛び込んで來ると、讀いて警官の一隊。キチーの旅館の殺人犯の嫌疑者として三人を取調べに來たのである。フレデリックも今はキチーを出してやらねばならぬ。

（三〇）殺人の嫌疑

フレデリックは警官に引かるゝ前に、部下の者を二人呼んで、『自分等の到着する前に行つて死骸を片着けて了へ。』と、手帳の端に書いて密かに示した。

やがて三人は警官に連れられて邸を出る。門の處まで來ると、ロローは突然警官を蹴倒して逃げる。そして間道から例の旅館に忍び入つて、キチーの居間に入る。見ると向ふの札の蔭に何か黑いものが動いてゐる。それは惡漢アバッチが今ま死骸の懷を探つてゐるのだ。ロローは矢庭にアバッチの後から飛び掛つて後手に縛し上げた。其儘引立てゝ、フレデリック伯とキチーとを取調中の警官の前へ突き着ける。

これと入違ひにフレデリック伯の部下の者

二名は、主人の命令に依つて旅館の裏口から忍び込んで死骸を持出し、崖の上から轉し落す。其後へ檢屍の役人が臨場したが、死骸の影も形もない。一同呆れ果てる。

（三一）胸元へピストル

檢屍の役人がプリ〳〵怒りながら去つた後にはキチーと、ロローと、フレデリックと、サチオ伯、互ひにジロ〳〵と顏を見合つて居る。ところへ突然アバッチの乾兒五六人がバラ〳〵と入つて來て、四人に短銃を突き着けた。そして其の一人はキチーの胸元へ短銃の口を押し當て、凄い眼付で嚇かした。キチーは隱してゐた金貨の半片を渡さねばならなかつた。キチーは地團太を踏んだ。

アバッチの兒分は更に階下の方へ行つて警官に短銃を突き着け、今や引立てられんとする親分のアバッチを奪ふ。そして金貨の半片は今持つて居るよりは、サチオに賣付けて後で又盜んだ方が可いと考へ、之れを高い値段で賣る。買ひ取つたサチオ伯はホク〳〵喜んで自働車で歸る。これを本藤から見てゐたフ

レデリック伯は、早速自分も自働車で其後を追ひ蒐けた。

（三二）汽車と自働車と馬

自働車上のフレデリック伯を認めたキチーとロロー、何と思つたか伯をば引きづり降して自分等が飛び乘つた。そしてサチオ伯の後を追ふ。フレデリック伯は驚いて今度は馬に乘つて其後を追ふ。續いてアバッチの一隊が自働車で走る。更に警官の一隊が之れを追跡する。最後に國王の愛妾エロイスが馬に鞭打つて進む。

聽てサチオ伯は一の停車場まで來た。汽車は今將に出ようとする處である。サチオは部下の一人に金貨を渡して汽車に飛び乘らした。汽車は出た。此樣を見てゐたキチーとロローは、自動車のタイヤを外して軌道の上を走らせ、汽車の後を追ふ。

愛妾エロイスは既に落馬し、アバッチの一隊は停車場附近で警官と入亂れて大格鬪を演じて居る。

（三三）峨々たるロッキー峠

キチーの自働車が汽車とすれ〳〵になつた時、ロローは身を躍らして最後の無蓋車に飛び移つた。キチーも續いて飛び移る。二人は客車の方へ進み行くと、そこにサチオ伯の部下が居る。矢庭に首筋を捻つて、難なく金貨を奪ふ。ヤレ嬉しやと不圖後ろを振向くと、フレデリック伯は奔馬に鞭打つて疾風の如く汽車を追つて來るのだ。

フレデリック伯は驀て馬の上から汽車に飛び移つた。玆に三人は組ず離つ車上で大格闘を始める。汽車はだん〳〵と進んで、隣國グラホーヘンの停車場近くまで來た。停車場ではグラホーヘンの軍隊が、金貨を奪ひ取らうとして待ち構へて居る。此事に氣の附いた三人は、今は味方同志喧嘩をしてゐる時でばないと、早くも汽車から飛び降りて逃げる。グラホーヘンの軍隊は血眼になつて追掛けて來た。行手は峨々たるロッキー峠。

（三四）兩國の開戰

三人はロッキーの絶頂まで登つて來た。下からはグラホーヘンの軍隊が盛んに發砲をする。ロローは怪力を揮つて岩石を投げ附けなどして居たが、迚も衆寡敵するものでばない。キチーは一先づグレッホーヘンに歸つて王の援兵を求める爲に去る。玆に愈々グレッホーヘン、グラホーヘンの兩國が、ロッキーの峠に於て戰端を開く事となる。

聽てグレッホーヘンの軍隊は雲霞の如く押寄せた。グラホーヘンの軍隊は之れに恐れをなして一歩々々退いて行く。ロローは面白くなつて唯一騎無茶苦茶に突き進んだ。そして遂に敵のために捕へられ、再びグラホーヘンの獄舍に呻吟する身となつた。

（三五）地下室に累々たる骸骨

戰ひはグレッホーヘン國の勝利となつた。ミチエル王は玆に盛んなる祝宴を張る。キチーとフレデリック伯とは殊勳者として主賓の待遇を受けた。たゞロローだけは此宴に連る事の出來ぬのが頗る遺憾である。

酒宴終れば、國王も將卒も盞の疲れで間もなく眠つて了ふ。然し、キチーはロローの身の上を思へば眠る事も出來ない。皆の寢息を覗ひながら王の居間に忍び込み、寶の所在を探すべく何か手掛りとなるものでも無いかと探せど、何物もない。試みに向ふの扉を押して見ると、スーウと開く。斯うして一枚々々と段々に開けて行くと、廣い地下室の樣な處へ出た。思ひきや其處には纍々たる數多の骸骨が散らかつて居る。中には頭を擡げ、手を動かしてゐるのさへある。キチーはキャツと首つて倒れた。

「何うしました、キチーさん」と呼ばれて漸く我れに返ると、其處にフレデリック伯が立つて居る。そも此所は何處？　何の怪？

（三六）アバッチの自働車へ

それからキチーは旅館に歸り、整朝顔を整すと、折柄紐育のガゼット新聞社から彼女を慰る爲めに、一疋の小犬を送つて來た。そこへ又ミチェル王から美しい花束が送られ

る。王は密かに彼女を愛してゐる。

王はやがてキチーを訪づれ、昨日の職ひの跡を弔はうと、共に自動車で出掛ける。其後を見えつ隠れつ自働車で蹤けて行つた惡漢アバッチは、『待てッ』と大喝一聲、忽ち間道から現はれて王の自働車に飛び乘る。王はブルブルと慄えた。此時アバッチの自働車の運轉手が急に立上つて、アバッチに短銃を差向けた。それはフレデリック伯が化け込んで居たので・キチーと王とは危い處を助かつた。

（三七）ロロー、猛牛と格闘す

こちらは快漢ロロー、敵國グラホーヘンの獄舍に投げ込まれて呻吟して居たが、或日窓の鐵格子を捻つて逃亡を企てる。然るに怒ち番兵に捕へられる。フイリップ王は敗戰の矢先き更に此事を聞いて大いに怒り、ロローを死刑に處する。而かも嬲り殺しにしてくれやうと、身に寸鐵を帶びないロローを闘牛場へ引き出す。怒れる猛牛は怒ち角を振立てゝ

ローに跳り寛つて來た、王を始め、數萬の見物人は手を拍つて囃し立てる。ロローは拳を固めて少時奮闘して居たが、突然飛鳥の如く身を換はして見物人の隙間から逃げた。

『それッ、ロローが逃げた！』と云ふので大勢の兵士等は直ちに後を追ふ。然し、ロローは巧みに欄を乗り越え、流れの中に身を潜めて居たので、遂に捕へる事が出來なかつた。

（三八）グラホーヘンの出兵

グラホーヘン國王フイリップは益々怒りに怒つて、其日の午後俄かに軍隊を召集し、グレッホーヘンに向つて攻めさせる。數萬の軍隊は枚を含んでロッキーの嶮を越え、雲霞の如く攻め寄せた。グレッホーヘンでは勝利の酒宴の眞最中、突然不意を喰つたので慌ち見苦しい敗を遂げる。キチーはミチエル王とフレデリック伯とを伴つて、多くの骸骨の散らかつてゐる例の地下室へと逃げ込む。然し、グラホーンの兵は尚ほも追究して手を緩めないので、キチーは滿身の力を單めて、地下室

の隅にあつた水道の螺旋を廻す。と、忽ち物凄き水聲と共に水は豁々として、隣室に充ちてゐる兵士の頭上に落下する。騒ぎは一通りでない。水は次第々々に増して逃げる事も出來ず、今は溺死を待つばかり。遂に降を乞ふに至つた。

（三九）紙片の怪文字

斯くてグラホーヘンの軍隊は旗を捲て逃げ歸つたが、こゝに唯だ一人サチオ伯は、散らかつて居る死骸の間をうろついて歩く。その中に、破れた一枚の紙片を見出した。何心なく手に取り上げて見ると、『グレッホーヘンの先帝ミチエル第一世は、フレデリック伯の父が殺し、皇太子を追やり、己れの子を擧げてミチエル第二世とした』と云ふ意味の事を書いてあるので。サチオ伯はこれをポケットに捻ぢこんで微笑みながら向ふへ行く。此時ロローが不意に現はれて其後を縱けた。

サチオ伯は途中で水溜に足を辷らして脚を濡らしたので、それを脱いで乾かして居ると、隙を窺つたロローは素早く其のポケット

の紙片を取出して逃げる。

（四〇）樹上のロロー

ロローは老樹の股に腰かけて奪つた紙片を廣げ、驚きの眼を以て讀んで居ると、

『その紙片を返せ』。と下から叫ぶものがある見ると、グラホーヘンの兵八人が八つの銃口を揃へて自分を狙つて居る。其後ろにサチオ伯が腕を振つて命令を下して居る。

ロローは仕方がないから樹の上から降りて來た。そしてサチオ伯の爲すが儘に委して居る。紙片も再び奪はれた。そこへキチーがやつて來た。サチオはキチーに向つて、

『私の國まで兎に角來て下さい。』

『ロローも一處ですネ。では參りませう。』

とキチーもロローも。今日は何うした譯か案外平氣である。八名の兵士に圍まれて二人はやがてグラホーヘンに送られた。そしてロローは又もや牢に叩き込まれる。

（四一）慘憺たる戰ひの跡

ロローは其の翌朝破獄をしたが、忽ち捕へ

られて王の前に引出された。其處にキチーも五六人の兵士に取圍まれて居る。折柄やつて來たサチオ伯と王は何事をか囁いて薄氣味の惡い笑みを浮べたが、キチーとロローには其の意味が分らない。

話換つて此方はフレデリック伯、戰ひの翌日、キチーの旅館を訪ふたが彼女は居ない。方りの慘憺たる光景は徒らに昨日の戰ひの烈しかりしを物語つてゐる。フレデリックは急にキチーの安否が氣遣れ出した。確的グラホーヘンに行つて居るに違ひないと察して、早速部下の者二人を遣はしキチーの樣子を探らせる。

（四二）柔かい變な荷物

二人は直ちに馬車に乘つてグラホーヘンに着し、王宮を第一に探つたがキチーの居る氣振りもない。翌くる朝不圖、海岸町の汽船會社の前を通り覓ると、フイリップ王とサチオ伯とが變裝をしてうろ〳〵して居る。そしてサチオ伯はクイン號の出帆時間を問合はした。これは事件は何かクイン號に關係してゐ

るに相違ないと、フレデリック伯の部下の一人は直ちに伯に報告すべく歸る。又他の一人は影の如く王とサチオとに附添つて、其の擧動を覗つて居る。

それとも知らぬ二人は更に船員らしい二人の黑奴を呼んで何かヒソ〳〵と話して立去つた。暫くして二人の黑奴は長い柔かさうな變な形をした荷物を擔いで、倉庫の中から出て來た。やがて其れを手車に載せて棧橋の方へ運んで行く。フレデリック伯の部下は突然短銃を突きつけると、黑奴は慄へ上つた、其隙に乘じて其の荷物を調べようとすると、後から組付いたのはサチオ伯！　そして黑奴と力を合はして棧橋から海へ突き落した。怪しい荷物は遂にクイン號の船底に積み込まれたのである。

（四三）自動短艇で全快力

フレデリック伯は部下の知らせに依つて直ちに急行列車に飛び乘つて、グラボーヘンの汽船會社に願け付ける。然るにクイン號は既に出帆し、もう十二哩も走つて居るだらうと

云ふ。フレデリックは失望しながらも棧橋まで來て見ると、其處にツブ濡れになつた男が居る。それは自分の部下である。怪しき荷物の事、サチオに依つて海に投ぜられた事などを聞いて、フレデリック伯は愈々捨てゝ置かれずと、近くに碇泊してゐた自動短艇を呼んで、一人の部下と共に飛び乘り、全速力で、以てクイン號の後を追はせる。

短艇は矢のごとく駛るが、クイン號は僅かに水平線上に一抹の黑煙を見せてゐるばかりで、容易に追ひ付かれさうにもない。だが、だん〳〵に船體は明かに見えるやうになつた。茲に益々勇氣を得て、山の如き巨浪を突いて進む。

（四四）船底の黑奴

短艇と汽船とは次第に距離が近づいたクイン號の方では後ろの方から一艘の自動短艇が『おーい、おーい』と呼びながら進行して來るので、乘後れた客だらうと、速力を少し緩める、遂々短艇はクイン號の舷側に寄添つたそこで、船長は縄梯子を下させる。フレデ

リック伯と其の部下とは息急ぎ切つて甲板上に登つて來た。

『この船には女を荷物の樣にして載せてある筈です』と、フレデリック伯が言ふと船長は驚いた、例の二人の黑奴は蔭でこれを聞いてゐて更に驚いた。そして急いで怪しい荷物を置いてある船室の方へ行く、一層海へ放り込まうと云ふ。其處へ船長がフレデリックを伴つて入つて來て、黑奴を問詰める。

此時船員の一人が、凍鑵に故障が出來たと云つて周章て知らせに來た。船長は其方へ行く。後に殘つたフレデリック伯は黑奴と押問答をして居たが、遂に格闘を始める。例の怪しい荷物は其の隣の船室にある。

(四五) 包から女の腕

薄暗い汚ない船室の一隅にあつた怪しい荷物は、むく〳〵と動き出した。そして其の破れ目からは、眞白い柔かい二本の腕がニユツと出た。次で振り亂された女の髪がこぼれるやがて半身を現はした、其れは正しくキチーである。キチーはキヨロと〳〵邊りを見廻し

た。隣ではドタン、バタンと人の爭ふ音がする。戸口に忍び寄つて中を覗くと二人の黑人とフレデリック伯！　キチーは驚いて飛び出して行つて、フレデリックに加勢をした。黑人は隙を窺つて逃げ出す。

『おゝキチーさん。』『おゝ伯爵！』『ロローは何うしました。』『さう、あの袋の中に矢張り入れられて居るかも知れません。』

そこで二人は隣の室に行つて、キチーの出た跡の袋を更に破つて見るとロローは、眼をこすり〳〵中から出て來た。

此時、上の方で人のけたゝましく叫ぶ聲が聞える。汽鑵の破烈！　浸水の音！

(四六) クイン號の沈沒

クイン號は遂に沈沒せんとしてをる。子供の泣聲、女の悲鳴、人々の狂奔、甲板を洗ふ波浪の響、船體は愈々傾く。山の如き巨濤は轟々と唸りを立てゝゐる。

人々は扉、木片等につかまつて、浪のまに〳〵漂ひ出した。キチーも、ロローも、フレデリック伯も今は離れ〳〵になつた。

それから幾時間の後であつたらう。キチーは南洋の一孤島に漂着した。見ると、ロローも波打際に打上げられて仆れて居る。然し、もう死人のやうになつて息も絶え〳〵である。

キチーは富豪の末、誰かこの島の人の手でも借りようと、砂丘の上に登つて犀の限り救ひを呼んだ。すると向ふの椰子の葉蔭に休んで居た裸の大男がヌックと、立上つて此方へスタ〳〵とやつて來る。キチーは其の獰猛な顏を見て驚いて逃げ出した。

（四七）キチー蠻人に捕はる

キチーは蠻人に追はれ〳〵て圍ある藪壘の中へ身を潜めて居ると、更に十數名の蠻人が現はれて手に手に棍、投槍等を持つて前後左右を取圍むだキチーは、今は絶體絶命、遂に蠻人の一隊に捕へられて、酋長の處へ連れて行かれる、蠻人等はキチを珍らしがつて、盛んに惡戲をする。

こちらはフレデリック伯これも、此の島に

流れ着いて矢張り土人に捕へられたが、これはキチーを捕へた土人とは違つて性質が非常に溫順である。惡戲もせず、貝殼で造つた器に水を盛て與へなどする。フレデリックは何か一つ驚かしてやらうと、短銃を取出して、向ふの水面に遊んでゐる水鳥を打つて見せると、果して非常に驚いた。果てはこれは神樣に相違ないと、蠻人等は地上にひれ伏して降參の意を表する。そして、叮嚀に其の部落へ案内した。

（四八）キチー火刑に處せらる

酋長の處へ連れて行かれたキチーは、散々に嬲られた上に、陋穢しい牢の中へ入れられる、流石のキチーも辛棒し切れず、酋長を突き飛ばして逃げようとすると、酋長は大いに怒つて、火焙りの刑に處する。

巖石の聳え立つた山の一角に建てられた祠の前に、枯木や枯草を積んで火を點け、今やキチーをは其中に投ぜんとする。蠻人等は何

か呪文を稱へながら火の周圍を跳り狂ふて歩く、火は更に烟々と燃え上る、キチーは觀念の眼をつぶつて今は死を待つばかり。唯だ殘念な事は、今自分の持つて居る金貨の半片が此儘世に出でずして燒け朽ち果つる事である。

今や一人の蠻人はキチーを兩手に高く差上げた。折柄向ふから砂烟を立てゝ驅けて來る蠻人の一隊！　然るに彼等は神の御前の火と見るや逃げ出して了ふ、唯だ其後に一人の男が殘つた。それはフレデリック伯。

（四九）岩窟に女の聲

フレデリックは蠻人等に逃げ去られたが、キチーを救出さねばならぬ、燃え上る、火の手を目掛けて一生懸命に走つたが、土地不案内の悲しさには、容易に其處に達する事が出來ない。火は益々燒え盛る。――と、思ふ間に火は急に細つて、やがてパタリと消えたやう。『失敗つた！』と思つた。

それでも其儘には打捨てゝ置かれぬ。フレデリックは更に氣を取直して道を急ぐと、不

圖行手の方に當つて一ツの岩穴が見える。而かも中には何か人の話聲が聞えるやうだ。何心なく中へ進み入ると、確かに人の居る樣子そして一人は女のやうだ。

（五〇）怪しの老人

『おゝキチーさん！』フレデリック伯は思はず叫んだ、岩穴の中には一人の老人とキチーとが居た。キチーもフレデリックと思はぬ對面に喜ぶこと一方でない。

キチーは蠻人の手に依つて今や火焔の中に投ぜられんとする時、この老人に救はれたので。老人は神に仕へる使者として蠻人等に最も畏れ敬まはれて居る。そも此の老人の前身は何者であらうか。彼れは驀て岩穴の奥の扉を開いて中より取出した數種の書類、見ると圖らずもグレッホーヘン國の王宮に關したものばかり。フレデリックとキチーとは非常に驚いた。

突然、岩穴の外で多くの蠻人共の立騒ぐ聲が聞える。一と先づ此處を落ち延びるに如かずと、老人は日頃愛してゐる猛々を抱き兩人

を連れて岩穴の一方の口から逃げる。

（五一）蕃人と大格闘

キチーとフレデリックは老人に伴なはれて海岸の方へ出と、更に蕃人の一隊に見附られた。蕃人は手槍を投げる。フレデリックは短銃を放つ。玆に兩者の大格闘が始まつた。然し、敵手は大勢で此方は僅か三人の事であれば、次第に危くなる。今は絶體絶命、蕃人の毒手に掛つて斃れるより他はない。――と、遙か向ふの沖合から一艘の汽船、黒烟を吐いて此方へやつて來る。三人は手を擧げ、聲の限りに救ひ呼んだ。

汽船の方では双眼鏡を手にして海岸の騒ぎを眺めて居た船長、急にニヤ〳〵して、

『おッ女が居る。白人の女が居る。急いで助けてやれ！』と船員に命令を下すと、短艇は直ちに下されて、波を切つて濱邊の方へ進む次第に近づくと共に、船員は蕃人目懸けて鐵砲を打つた。一人仆れる、二人仆れる、果ては散り〳〵に逃げて了ふ。

玆に三人は無事に救はれたのである。

（五二）ロローの父

汽船プリンセス號に救はれたキチーと、フレデリックと、老人の三人は、二三日航海を續けてゐる中に次第に心安くなつた。そして圖らずも老人はロローの父であると云ふ事が分つて、互ひに其の奇遇に驚く。そしてロローは死んだのであらうか、生きてゐるであらうか、今は其の行方さへ知れず、三人は甲板上の月を仰で泣く。

こちらは船長、三人を救つた時から、キチーの美貌に思ひ焦す身となつた。或日の事、船長はキチーの室を訪づれて、遂々其の切ない心を打ち明ける。キチーは笑つて對手にしないので、船長は益々焦ら立ち、果ては無理にキチーの手を握らうとする。此時ムンツと船長の襟首を掴むだものがある。其れはフレデリック伯。船長は默つて立ち去つたが、それより深くフレデリックを怨む。

（五三）船長キチーを挑む

今日も亦船長はキチーを捕へて口説いて居

る。これを見たフレデリック伯は矢庭に後ろから毆り飛ばした。船長は大いに怒つて兩人は格闘をする。この物音を聞き付けて大勢の船員が駈付け來り、フレデリックを取抑へて船底に投げ込んで了つた。この騒ぎにロローの父は驚いたが、何うする事も出來ぬ。

船長は邪魔物のフレデリックを片付けたので、キチーを一室に閉ぢ込めて、嚇したり賺したりする。だが、キチーは何うしても應じない。船長は今はこれまでと、キチーを無理に擁き抱へ、其の薔薇色の頰に唇を押し當てた。此時突然入口の扉を叩く音がして、

『船長、グレッホーヘンの總理大臣が大勢の兵士を連れて參りました。』

（五四）グレッホーヘンの總理大臣

グレッホーヘンの總理大臣は果して七八人の兵士を連れて、周章しく自働短艇から汽船に上つて來た。これは曩にフレデリック伯が船長の樣子不穩なりと見るや、密かに無線電信室に入つて係りの者を嚇かし、本國グレッ

ホーヘンに向つて、救ひの電報を打たしからである。

『フレデリック伯爵を迎へに來ました。』と總理大臣は船長を見て言つた。

『そんな人は一人も居りませんが……。』と、船長は何處までも白ばくれて居るので、總理大臣は兵士に命令して、一々船室を檢べさした。然し何處にも居ない。最後に船長室まで行くと、扉が何うしても開かない。兵士はこれを蹴破つて中へ入ると、一人の女が倒れて居る。

『おうキチーさん、』と總理大臣は叫んだ。

（五五）遙かに敵艦

此方はフレデリック伯、船底に投げ込まれて非常な虐待を受けてゐる。ロローの父のみが側にゐてミルクを與へたりなどして、これを勞つてゐる。折柄五六人の船員が『この愚知らず奴……』とばかりにフレデリックに喰つて蒐つて、果ては格闘を始める。上になり下になりして居る中に、五六人の兵士が突然銃口を揃へて現はれた。其の後ろにグレッホ

ーヘンの總理大臣が立つて居る。

『伯爵、お怪我はお坐いませんか。』

聽てキチーとフレデリックとロローの父とは、總理大臣等と共に自働短艇に打ち乘り、波を蹴つてグレッホーヘン指して歸る。

キチーは望遠鏡を取出して、彼方此方と海の景色を眺めてゐると、遙か水平線の上に一雙の軍艦が見える。それは正しくグラホーヘンの軍艦！　而かも司令塔の上には武裝したフイリップ王とサチオ伯が、グレッホーヘンの方を眺めて居る。

（五六）ロッキー峠の激戰

グラホーヘンでは、グレッホーヘン國王ミチエル二世を唆かして酒色に耽らせ、フレデリックとキチーの留守を幸ひに、一擧グレッホーヘンを征服しようと云ふ計略。

斯くて陸軍は砲を引き、馬を連ねてロッキの峠を越して行く。海軍はフイリップ王親ら總司令官となり、サチオ伯は參謀總長となつて、戰艦を浮べて堂々と進む。

グレッホーヘン國王は相變らずに酒と女に浸つてゐたが、急を突かれて驚いて防戰の準備をする。玆に兩國の要塞戰は開始せられた此方はロッキー峠下の小高い丘に陣取つて、要塞に向つて盛んに火蓋を切る。グラホーヘンの軍隊は海からも陸からも攻擊は益々猛烈である。砲烟、彈雨、號叫、叱咤、天地は忽ち一大修羅場と化した。

然るに衆寡敵せず、グレッホーヘンの要塞は遂に破れた。死屍は山と積まれ、鮮血は河と流るゝ要塞上に、やがてグラホーヘンの國旗が高く風に飜つた。

（五七）裝甲自働車で突破す

遙か海上より要塞の陷落を眺め遣つたフレデリック伯とキチーは、全速力を出して自働短艇を飛ばし、漸く要塞の裏に着いた。見ると、敵は既に四邊を占領して居る。王宮へ歸るには何うしても敵の陣中を横斷しなければならぬ。二人は大いに困つた。――不圖向ふを見ると壘の蔭に、一臺の裝甲自働車が置い

てある。天の助けと直ちにこれに飛び乘つて敵中を突破する。敵兵は驚いて盛んにこれに向つて發砲したが、鋼鐵を以て蔽はれた軍用自働車の事とて、少しも効果がない。却つて馬や人を蹴倒して去る。

キチーとフレデリックは間もなく王宮に着いた。國王はと見ると、早や職ひを外にして飲めや唄への騒ぎの眞最中。二人は憤然として怒つたが、今は國王を責めて居る場合ではないと、急いで敵軍撃退の準備に取掛る。

（五八）兩伯眞劍の勝負

一度び敵に打破られたグレッホーヘンの軍隊も、フレデリックとキチーが歸つたと聞いて俄かに活氣附いた。百姓や市民までも劍を執り、銃を擔いで意氣天を衝くばかり。そして戰に勝誇つて氣を緩めて居るグラホーヘンの軍に向つて殺到すると、忽ち周章へて逃げ出した。玆に要塞は再びグレッホーヘンのものとなる。勝鬪は山に野に響き渡る。

こちらはサチオ伯、密かに王宮に忍び入つて例の地下室へ降る。四邊を伺ふと、向ふの壁の處にフレデリック伯が立つて居る。見附けられた上からばとサチオが勝負を挑めば、フレデリックも之れに應じた。暫く組んづ離れつして居たが遂に眞劍の勝負となる。二人の劍の切尖は風に鳴つた。突く、受ける、打つ、引く、虚々實々火花は地下室の暗に散る。

此時、キチーが駈け込んで來た。

（五九）財寶の所在

フレデリックの劍は遂にサチオの胸を突いた。サチオは紅血に染みて瞠と倒れる。其時サチオのポケットから轉げ落ちた金貨の半片

―これはフレデリックの留守の間にサチオの部下が盜んで來たものである。キチーは走り寄つてこれを拾ひ上げた。他の半片は自分が持つて居る。取出して合せて見ると、ピタリと合ふ。

『おゝー』と、キチーは雀躍した。今はフレデリック伯と心が一つになつてゐるので、共に顔を寄せて金貨のラテン語を讀めば、『グレッホーヘンの王宮の中央より、南方十五間、

地下室の神殿の前、三歩の敷石の下……』と書いてある。

二人は其方へ行つた。

（六〇）神前の王冠

文字通り辿つて其の地下室へ入つて行くと其の中央に三尺四方位の板が嵌めてある。この板を起さうとしたが中々起きない。ところへロローの父がやつて來た。三人して開けると、漸くにして開いた。するとまた其の下に大きな地下室がある。三人は更に其處へ入つて段々に辿つて行くと、果して禮拜堂があつた。

『神殿の前、三歩の敷石の下……』と、金貨に書いてある通りに敷石を起すと、深い穴がある。フレデリック伯は頭を突き込んで中から燦爛たる王冠を取出した。次で首飾り其他の多くの金銀財寶を取出す。三人は目を圓くして驚くばかりで、一語も出ない。そして最後に一片の紙を取上げた。これこそグレッホーヘンの先帝の遺言狀である。

（六一）卅年前の物語

ロローの父はフレデリックの顏と遺言狀とを見比べながら、三十年前の長い物語をし始めた。

其れは、グレッホーヘンと隣國のグラホーヘンとが、恰度今のやうに戰ひを交へて居る時で、グレッホーヘンはミチエル一世の治下にあつた。ミチエル一世は不幸にして戰ひに敗れ、せめて王冠其他の寶物だけは敵に奪はれまいと、密かにこれを地下室の禮拜堂の前の敷石の下に埋めた。そして其の位置を一つの金貨に詳しく彫り込み、これを二つに割つて、其の一片づゝを二人の大將に與へたが、其の一人はロローの父で、一人は伯爵フレデリック一世である。

然るに豫て王位を狙つて居た姦惡なるフレデリック一世は、戰亂に紛れて自分の子とミチエル王の王子とを擦り換へた。そしてミチエル王も、フレデリック伯も間もなく敵彈に斃れた

『ですから、今のミチエル二世は實は先のフ

レデリック伯の子で、貴下こそはミチエル二世でなければなりませぬ。」と、ロローの父はフレデリック伯に言つた。

（六二）一切の疑問の氷解

フレデリック伯は此事を聞いて氣も狂はんばかりに驚いた。キチーも早速此旨を總理大臣の許に告げると、總理大臣は直に駈け付けた。やがて一同は禮拜堂の前を去つて次の地下室まで行くと、苦しい息を吐きながら柱に凭り掛つて居たサチオ伯はこの有樣を見て、驚て疑問の眞のミチエル二世はフレデリック伯であつた事を知り、突然直立して最敬禮を爲し、

『ミチエル二世陛下、今までの不敬は吳々もお許し下されよ。』と言つて、どつと倒れた。

フレデリック伯は其處を立去り、總理大臣と共に王の居間へ行く。そして女官等に戲れて居た僞のミチエル二世をば追ひ除け、悠々として玉座に就いた。總理大臣並びにロローの父は新帝の前に跪く。

（六三）春風春水一時に到る

玆に凡ての疑問が氷解した。キチーは早速米國紐育のガセット新聞社に復命して、愈々探偵小說の執筆に着手しようとしたが、フレデリック即ち新たなるミチエル二世は、キチーの才幹を惜んで無理に引止め、遂に王妃に擧げた。聰明なる國王と、慈悲深き王妃とは聽て新政を布き、流石に亂れたるグレッホーヘンの國政も、今は再び整ひ來つて、國民の前途には樂しい春の光が滿ち〳〵た。次で芽出度き即位の式が擧げられる。國民は熱狂して『ミチエル二世陛下萬歲！』と、歡呼の聲を揚げた。

然るに玆に遺憾なのは、快漢ロローの行方である。彼れは抑も南洋の一孤島に流れ着いた儘で斃れ果てたであらうか、其れとも又何處かの天地に在つて回天の事業を畫策しつゝあるであらうか、記者は更に筆を改めて『名金後日譚』と題して、讀者諸君に紹介する積りである。（大團圓）

大正五年三月十五日印刷
大正五年三月十八日發行

探偵活劇 名金奥付

不許複製

著作兼發行者　東京市神田區淡路町一丁目一番地　今西春吉
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　仙葉元太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市神田區淡路町一丁目一番地　講談落語社　振替貯金口座東京二四〇六九番

正價金拾錢

賣捌所
東京神田　東京堂
東京京橋　東海堂
東京京橋　北隆館
東京京橋　良明堂
東京日本橋　至誠堂

278
989

終